

# 学長室だより

2014.2.4 NO.3

## アメリカ中西部大平原で演歌を聴く

日本の大学の中でも世界基準の教育でその先端にある国際教養大学の学長が日本の歌に関心があると言うだけなら差して違和感を持って受け止められることはなかろうと思うが、日本の歌の中でも演歌が好きだと言ったら、ある種驚きになるだろうか。実は私は演歌が好きなのである。しかも、1980年よりも以前の演歌が好きなのであるということになるとますます解し兼ねるということになるだろう。更に、序であるから、もう一つ解し兼ねることを付け加えるとすれば、私の好きな演歌はアメリカ中西部の暑い夏の夕日の大平原をどこまでも伸びるハイウエーと結びついているのである。何故か。以下がその説明である。

私は1980年代初めの頃、イリノイ大学の経営学部の教員をしていた。丁度その頃、イリノイ大学があるイリノイ州アバナ・シャンペーン (Urbana・Champaign) 市から南西370キロ程行ったところにあるミズーリ州セントルイス (St. Louis) 市に新設されたインターナショナル・グラジュエートスクールという経営学と教育学のみの大学院博士課程を持つ大学で、毎夏6週間の夏期集中講義を教えた。この大学院大学では夏期集中講義期間中はセントルイス市内のフォレストパークホテルという大きなホテルに全米から学生が集まり、我々教員とホテル住まいしながら授業や論文指導を受け、それ以外の時期は全米各地に散らばって通信教育で指導を受けるシステムで、学生は200名くらいであった。学生達は博士号を持たずに大学で教えている現役の大学教員で、このプログラムで博士論文を書き、博士号を取得することを目指している中年以上の人達であった。

セントルイスの夏はとにかく暑い。ホテル内で教室に割り当てられた部屋で毎日午前9時から正午くらいまで授業や論文の指導をすると、その後はホテルのプールで泳ぐか近くにあるセントルイス市内で一番大きなフォレストパークで1周10マイルのジョギングをする以外にはあとは何もする事がない。月曜日から金曜日まで、毎日教える以外はこの気だるく退屈な日々をようやく過ごす、週末は金曜日の授業が終わるや否、セントルイスからアバナ・シャンペーンまでの370キロを飛ぶように車を運転して私を待つ家族のもとに帰ったのだった。しかし、その週末2日間の家族と過ごす時間が楽しければ楽しいだけ、日曜日に来て、その午後の夕暮れ時に再び車でセントルイスを目指してアバナ・シャンペーンの自宅を出なくてはならないつらさは言いようがなかった。幼かった子供達が車の近くでかわいい手を振って私を見送った光景などは、目に焼き付いていたものだった。アバナ・シャンペーンを出てインターステート57号線を一路100マイル(約150キロ)ほど南下し、エフィンガム (Effingham) という小さな町の郊外を右手に折れて今度はインターステート40号線を150マイル(230キロ)ほど南西にドライブするのだ。このアバナ・シャンペーンとエフィンガム間をまっすぐに南下する150キロとエフィンガムから折れてセントルイスまで西に向かう230キロの道路はエフィンガムで90度折れ曲がる以外はほ

とんど一直線なのであった。片道ドライブに大体4時間はかかる。これを毎週繰り返したのだ。セントルイスに入る手前にミシシッピ川があり、川にかかる大きな橋の手前にあるイーストセントルイス地区からはるかにセントルイス市街を望むと、夕日が沈む向こう岸に、セントルイスのシンボルである、高さが240メートルの「The Gate to the West」のアーチが見えるのであった。

さて、私と演歌の関係は、あの暑い夏の毎週末を8時間かけてセントルイスとアバナ・シャンペーンを往復していた思い出に由来する。あの気だるい夏の夕暮れ時、家族と別れて中西部の大平原を貫く一直線のハイウエーを車で飛ばして行かなければならない。その途中は家族との別れや子供達の笑い声が思い出されて胸が潰れそうになる中を、夕日が沈むのを追って行かなければならない。一直線のハイウエーの運転には睡魔がつきものだ。眠気を覚まし自分を励ますのに車内でカーラジオやカセットテープを聴いた。ジャズ、カントリー・ウエスタン、クラシック、シャンソン、フォーク、ラテン……。ところが何を掛けてもこれらの西洋音楽は眠気覚ましには効き目がない。猛スピードでハイウエーを運転しながら、眠くなって意気消沈ばかりなのだ。そこで、ふと、他のカセットテープの下に埋もれていた日本語の題のついたカセットテープを、誰の歌が入っているのかもわからぬまま、カセットテープデッキに差し込んだ。するとそこで突然流れてきたのは森進一の歌う「命かれても」という曲であった。この曲は日本にいる時に通常の状況の中で聞いていたならば何の感慨も引き起こさないものだったに違いない。ところが、場所は中西部の大平原のハイウエー、時は夕日が地平線に沈む夕闇近く、そして気分は家族と別れて来た後の辛い心境である。この「命かれても」のメロディと森進一のハスキーな声が私の心に侵入してきて私の心を驚つかみするのにはこれ以上の好条件はなかった。森進一の声が耳に届くや、私は時速100キロ以上のスピードで運転中であつたにも関わらず、テープに合わせて大声をひねり出して森進一流で歌いだしていた。また、わけもわからず涙が出てきて抑えられなかった。演歌のメロディや歌詞や森進一の声の質等の総合されたものが私を感情的にさせていたのであろう。車の運転中この同じ曲を何回繰り返して聞き、歌ったか知れない。それ以来、私のセントルイス往復には、今の人達からすれば既に忘れ去られているであろう様な演歌歌手達の曲が欠かせないものになっていったのである。その後、これらの演歌に交じって、主として東北地方の民謡も私のお気に入りのリスト入りした。彼らは私と一緒に中西部を何度も何度も往復した仲なのである。ただ、私が1986年にアメリカから日本に帰国すると、その頃流行っていた演歌はその歌詞やメロディやテンポは1時代前のものとはずいぶんと変わってしまっており、私の心を揺すぶるようなものではなくなっていた。したがって、私の好きな演歌というのも、1980年代初期までのものに尽きるのである。

注) このエッセイで紹介した International Graduate School はその後、運営形態を変えて Greenleaf University として存続している。同大学院大学の成功を心から祈るものである。



鈴木 典比古